

ピアノを中心とした「保育音楽力」の在り方と 養成校の音楽授業に関する考察

赤井 裕美^a

^a 湘北短期大学保育学科

【抄録】

保育者不足が深刻化している昨今、保育者養成校には、学生に保育士・幼稚園教諭の仕事の面白さを実感させられるような教育を提供していくことがより求められるようになる。そこで、著者が専門とする保育音楽、特にピアノ教育を中心に、仕事に直結する音楽力とは何かを、先行する研究をベースに統合的に考察する。また、その力を身につけさせるために、保育者養成校、特に短期大学が実施すべき授業の在り方について考察を行う。

【キーワード】

保育現場 ピアノ教育 短大

1. 研究の背景

近年の我が国における保育・幼児教育においては、保育と教育を一体的に行い、地域における子育て支援を行う「認定こども園」の設置や、待機児童解消に向けた「待機児童解消加速プラン」をはじめ、国レベルでの数々の施策が打ち出されてきた。

これらの施策は、個々には成果を挙げ、今後も継続的に遂行されると考えられる。しかしその一方で、保育者不足は依然として重大な問題として認識されている。厚生労働省によると、平成26年1月では保育士の有効求人倍率（幼稚園教諭は含まず）は1.74倍であり、我が国全体としての保育者の人手不足感は否めない。

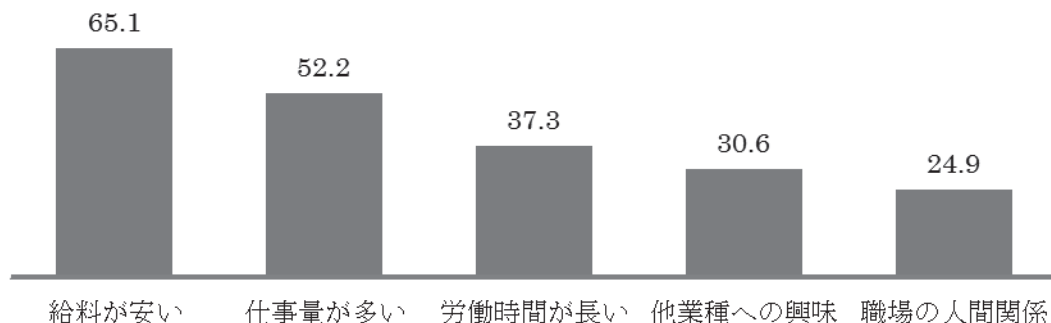
このような労働市場における供給不足は、結果として待機児童解消等に向けた数々の施策の阻害

要因となり得るため、国および各都道府県自治体等は、その現状の調査を行い、個別の施策を展開している。

例えば、平成26年3月に公表された東京都の「東京都保育士実態調査」によれば、保育者不足の主要因である退職の理由をアンケートによって分析しており、「給料の低さ（65.1%）」、「仕事量の多さ（52.2%）」、「労働時間が長い（37.3%）」等を中心とした回答を得ている（図表1）。東京都をはじめ、各自治体では、具体的にこれらを是正していくための事業等が立ち上げられているが、これらの施策は保育者としての最低限の立場や経済的価値を保障する側面が強く、保育者としての働きがいやモチベーションを上げるものにはなり得ていない。

現状の施策は職務不安を防止するが、それによって仕事に対する積極的な態度を引き出す効果

図表1 保育士の退職意向理由（複数回答、回答数=8,214、単位：%）



※) 上記グラフの母集団は、現在就労中の保育士の中で、退職意向を持っているもの
出所) 東京都保育士実態調査報告書（平成26年3月）より著者が加工

が生まれるとは言いがたい。保育者を増やし、彼ら、あるいは彼女らが積極性を持って仕事を遂行、達成していくための、動機づけに繋がる検討も行っていく必要がある。

著者が専門としている保育音楽の観点から、先に挙げた「東京都保育士実態調査」を見ると、少数ではあるが、「ピアノを簡単な音で弾ける弾き方を習いたい」という声や、「ピアノのレッスン、式やイベントで弾く曲をうた付で習いたい。ピアノの基本も再度習いたい」等の声も見られる。すなわち、動機づけ要因に資する施策に対するニーズも少なからず存在していることが見受けられる。

2. 研究の目的

背景に挙げたように、保育者不足の是正にあたっては、経済的処遇等と共に、動機づけ要因につながる取り組みも実施していくことが必要である。そして、この動機づけ要因の要素である「仕事の達成感」や「仕事への責任」は、保育者の教養やスキルのレベルに多分に依存していると考えられる。なぜなら、教養やスキルが無ければより挑

的なテーマや取り組みを行うことができないからである。よって、これらのレベルの向上については、大学をはじめとする保育者養成校が果たすべき役割は非常に大きいと考える。

本研究では、著者が専門とする保育音楽（特にピアノ）をテーマに、①「保育者の仕事の達成感を上げるために求められる、保育現場で十分に使いこなせるピアノを中心とした音楽の能力（これを本論文では、「保育音楽力」と呼ぶ）とは何か」を明確にするとともに、②「（特に著者が所属している短大において）保育音楽力を学生に身につけさせるために、どのような教育が求められるのか、現状から改善する余地はあるのか」という観点から考察を行う。特に、多くの短大が2年間という厳しい制約条件の中で学生を育成してきた取り組みについて考察することは、意義があると考えられる。

3. 求められる保育音楽力に関する分析と考察

【アプローチ】

保育音楽力に関する研究は、過去より実施され、多くの論文も発表されてきた。しかし、保育者に関する大規模な統計的分析を行っているものは、

著者が知り得る限りでは、見当たらない。

多くの論文は、①過去からのアカデミックな知見の積み上げをベースにしているもの、または②各論文の著者が所属する大学等の保育者養成校、及びその周辺の保育機関へのアンケート結果をベースにしている。

これらの研究は、非常に価値のあるものではあるが、特に昨今実施されているアンケート等の定量的な結果を、先行する研究と統合して分析し、示唆を得ようとする試みはあまり見られない。よって、本調査研究では、定性、定量の両面から先行研究を収集し、そこで得られた示唆を分析、統合することで、求められる保育音楽力に関する分析を実施する。

【対象とした論文の紹介と分析】

本調査研究では、2000年以降出稿された論文を中心に、特にピアノを主体とした保育音楽力に関するものとして、以下の6つの論文(図表2)を対象とした。以下、各々について著者が重要と考

えた点を中心に簡単な紹介を行う。

① 「保育現場で必要とされる音楽能力と、幼児音楽教育との関連」

本論文では、保育現場において必要とされるピアノ演奏技術を再考することを目的に、当大学が所在する福井市を中心とした幼稚園・保育所の代表者150人へのアンケート調査が行われている。

本論文では、アンケート調査を行う中で、ピアノ演奏や歌唱等、幼稚園・保育所における必要な音楽能力として、プロレベルの演奏を目指すよりも、平易な弾き歌いができることや、楽譜のアレンジができることを重視していること等、現場の生の声が収集されている(図表3)。また「高度な芸術作品を完璧に仕上げるのではなく、平易な楽曲をたくさんマスターし、場に応じて臨機応変に使い分けられる能力が求められる」と結論づけている。

図表2 調査対象とした論文

	論文タイトル	作成者等(敬称略)
①	保育現場で必要とされる音楽能力と、幼児音楽教育との関連	中野 研也・河野 久寿 (仁愛女子短期大学) 2012年
②	保育養成校における実践的ピアノ指導についての一考察	丸山 京子 (岐阜聖徳学園短期大学) 2005年
③	保育者養成におけるピアノ指導の現状と課題	宮脇 長谷子 (静岡県立大学短期大学部) 2001年
④	保育園・幼稚園教諭に求められるピアノ・スキルとは何か	澤田 まゆみ (新島学園短期大学) 2013年
⑤	保育士及び幼稚園教諭養成校のピアノ指導における一私見	新海 節 (帝京学園短期大学) 2008年
⑥	保育者養成と演奏技法 —保育指導としてのピアノ奏法—	奥 千恵子 (四天王寺大学) 2009年

※所属機関は、論文作成当時のもの

図表3 ①で記されているアンケート結果（一部抜粋）

ピアノ演奏や歌唱等、幼稚園・保育所における必要な音楽能力とは、どのようなものか？

	選択肢	回答数
A	ピアニストや歌手のように美しく演奏できること	2
B	平易な弾き歌いができること	128
C	楽曲のアレンジ能力例) メロディーだけの譜面に伴奏をつけられる、等	69
D	音楽能力は特に重視していない	5
E	その他	9

出所) 図表2記載論文より著者が加工

② 「保育養成校における実践的ピアノ指導についての一考察」

本論文では、ピアノ演奏技術の向上が音楽表現としての重要な要素と捉え、当大学が実施しているグレード制（図表4）、及び学生に対する「幼児歌曲の弾き歌い試験」の導入をもとに、学生の練習量と実践的なピアノ演奏力との関係を研究している。

その中で、練習によるピアノ演奏力の向上が、学生個々人の奏法の工夫へと繋がり、その結果、子どもにその都度、臨機応変に対応できるピアノ演奏力を身につけることができる、と指摘している。

③ 「保育者養成におけるピアノ指導の現状と課題」

本論文では、伝統的に実施されてきた「バイエル ピアノ教則本」（以下、「バイエル」と記す）を用いたピアノ教育の有効性を疑問視し、現状の保育者養成校でのピアノ指導の実態について調査と考察を行っている。

120強の保育者養成校からの回答を元に分析を行った結果、依然として「バイエル」を主軸とした教育が多く残っている一方で、ピアノ指導の形態にアンサンブルを取り入れる等の取り組みや、ピアノ指導の一環として簡易伴奏や即興伴奏等も取り入れられてきた点が、過去からの変化として指摘されている（図表5）。

図表4 ②で記されているグレード制（一部加工）

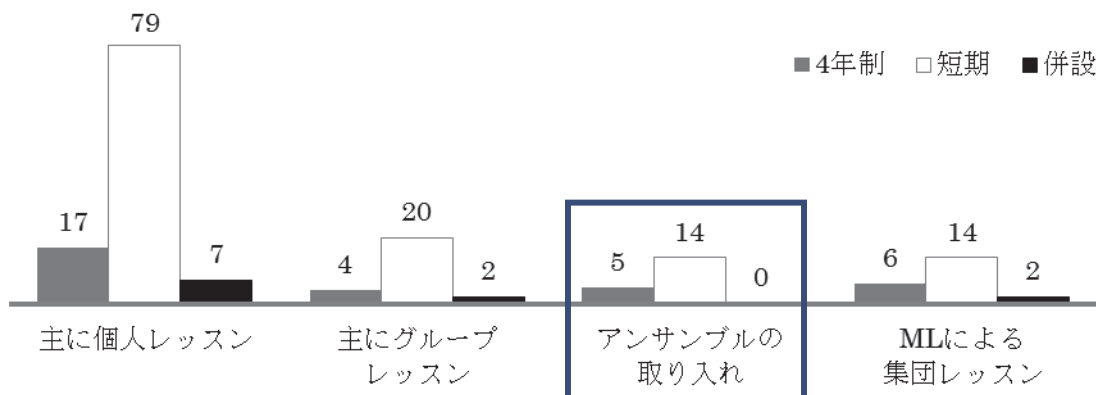
階層	グレード	階層	グレード
初心者	G0	初級者 (バイエル教則本終了者)	G5
	G1		G6
	G2	中級者 (ツェルニー 30番教則本)	G7
バイエル経験者	G3	上級者 (ツェルニー 40番教則本)	G8
	G4	G9	
			G10

※) 初年度でG4までの資格を獲得することを最低限の目標としている。

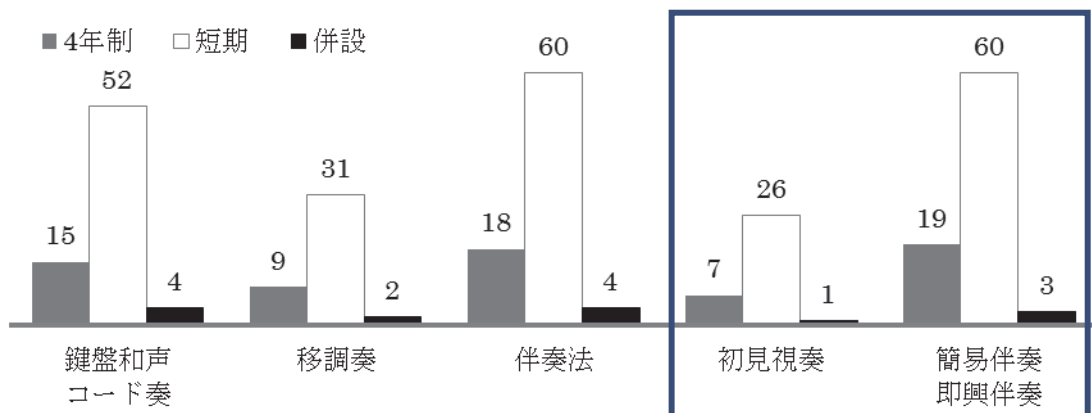
出所) 図表2記載論文より著者が加工

図表5 ③で記されているアンケート結果（一部抜粋）

A.ピアノ指導の形態（複数回答可）



B.ピアノ指導の授業科目において取り入れている活動（複数回答可）



単位：大学数

出所) 図表2 記載論文より著者が加工

④ 「保育園・幼稚園教諭に求められるピアノ・スキルとは何か」

本論文では、保育者に求められるピアノ・スキルを、先行的な文献研究をベースに考察することを目的に各種検討がされており、そのスキルを以下の8つにまとめている(図表6)。

その中で、図表6の1)～3)に挙げた、楽曲を前提としない、子どもや保育者自身の声や動き、イメージや心の動きをピアノで表現する力に着目

し、「子どもが歌う活動や音楽体験を充実させ、身体表現活動やリズム感の発達を促す」ことや、「子どもと言葉を交わすようにピアノを扱えるような、より即興的で創造的なピアノ・スキルが求められている」と結論づけている。

図表6 ④で記されているピアノ・スキル（一部抜粋）

	スキルの説明
1)	子どもの声や動きから、音程や音域、速さやリズム、強弱等をききとり、それをピアノにおいて模倣する、あるいはおきかえる力
2)	自らの声や動き、体の中にあるリズムを感じとり、それをピアノの音程や音域、速さやリズム、強弱等で表現する力
3)	子どもや自らがもつ様々なイメージや心の動きを、ピアノの音程や音域、速さやリズム、和音、強弱等によって即応的に表現する力
4)	楽曲から曲想やリズム感、フレーズ感を感じとり、それを豊かなイメージをもってピアノで弾いたり、弾きながら歌ったりする力
5)	子どもが歌うことの快さを感じることができるよう、子どもの息遣いや姿から適切な速さとフレーズ感を感じとり、音量のバランスにも配慮して伴奏する力
6)	自らの演奏技術や楽器の構造、音の原理、奏法等を把握し、子どもが理解し、共感できるようにやさしく具体的に紐解く力、そしてそれを園の教育方針や、日常的な保育において子どもの発達をかんがみながら適応的に用いる力
7)	ハ長調、ヘ長調、ト長調、ニ長調を中心とした各音階と主要三和音、及びその構成和音となるC、F、G、D、A、Bのコードネームのしくみ、転回形、七の和音を理解し、演奏する力
8)	子どもの音楽体験を充実させるため、わらべうたや童謡、クラシック曲など、様々な曲を演奏する力

出所) 図表2記載論文より著者が加工

⑤ 「保育士及び幼稚園教諭養成校のピアノ指導における一私見」

本論文では、幼稚園教育要領や、現状多くの大学等の保育者養成校で実施されている「バイエル」導入の背景等の分析を通して、学生に対するピアノ指導のあり方を検討している。

その中で、「保育士及び幼稚園教諭の養成校におけるピアノ指導は、保育者自身が音楽表現を楽しむ事、音楽または音そのものへの美しさを感じ、子どもたちとそれを共有すること」が重要であると結論づけ、保育者養成校は「学生たちがピアノを弾く時に楽しんでいるか、美しい音で弾いているか等に注目して、指導をおこなっていく必要が」あり、また、学生に対して「心のなかで歌いながら」弾くよう助言できるような指導が重要

であると述べている。

⑥ 「保育者養成と演奏技法－保育指導としてのピアノ奏法－」

本論文では、学生が卒業後、保育現場で真に役立つ実践力を身につけるための、保育者養成の在り方の検討を目的とし、先行する学術的研究をベースとした分析がされている。その中で、「間違えなくきちんと弾くことは、採用試験への近道であろう。しかしそれだけでは、保育者になれても、保育者として子どもの音楽的発達を助けることはできない」と指摘しており、「音楽の本質や音楽発達について正しい考えを持ち、現場で応用できる力を持つ、つまり、基礎理論を踏まえた上での指導力が必要となってくる。このアプローチの仕方

によれば、歌の指導や音楽会の準備でも、単に技能を教えるだけにとどまらず、音楽にふれる喜びを子どもに与えることができる」としている。

【分析と考察】

上記に挙げた論文においては、いずれも保育音楽力を、一般的に広く活用されている「バイエル」の演奏力とは捉えていない。子どもが幼少期に音に接すること自体の重要性を踏まえ、子どもの心理的な発達に資する音楽を提供することが保育音楽力であるとする考えは、どの論文にも共通している。うかがえる。

その上で、この保育音楽力をより具体的に整理すると、以下の様に捉えることができる。

〈基礎的スキル〉

「バイエル」を完璧に習得することが保育音楽力に繋がるという意見は無いが、定性・定量の両側面で見ても、最低限の基礎スキルを身につけるために「バイエル」を活用するという声は多い。具体的に、採用試験などでは「バイエル」100番程度、「ブルクミュラー 25の練習曲」程度を必要とする園は多く、このような、従来、幅広い保育者養成校でも教えられている基礎スキルは、保育音楽力の構成要素として重要である。

〈音楽の幅〉

保育現場においては、多種多様な楽曲が使われており、その点については、拙稿「保育現場の音楽表現活動の実態と短大教育の在り方に関する研究」(2013年湘北紀要第34号、共著)においても、100以上の楽曲が使われていることが確認されている。その際、そういった多くの楽曲に慣れていない、あるいは知らないようでは、現場で臨機応変に活用することができない。従って、如何にして短時間で読譜ができるようになるか等の力は、

保育音楽力の構成要素として重要である。

〈子どもとの対話としての調整・アレンジ力〉

音楽を通して子どもとふれあい、子どもの心理的な発達を促す上で、楽曲の伴奏づけの対応力を身につけることは必須と考えられる。伴奏には多種多様な方法が存在しており、状況に応じて弾き分けることで子どもの感情への働き掛けがしやすくなる。このような、複数の解釈の存在に対する理解と、伴奏を弾き分けられるための和音等に対する理解、読譜等の力が保育音楽力の構成要素として重要である。

〈保育現場における音楽〉

上述の論文でも挙げられているように、保育者養成校における音楽教育の中でも、特に演奏に関して正確性を求めるのはもっともなことではある。しかし、音楽が子どもの心理的な発達を促す際に有効であるという面から、むしろ現場で必要とされる即応力は重視されるべきであり、これらの部分も保育音楽力の構成要素として重要である。

4. 短大が取り組むべきことに関する分析と一考察

【アプローチ】

以上の検討により、保育者が身につけるべき、特にピアノを中心とした保育音楽力は4つに分類されることがわかった。

では、この力をつけさせるにあたり、現状では保育者養成校、とりわけ著者が所属する機関である「短大」ではどのようなアプローチをしているのか、欠けている点や改善できる点があるのかなどを明らかにするため、ランダムに選定した近隣の4つの短大の取り組みについて、情報収集が可能な範囲で調査を行い、全体としての傾向を分析する。

【各短大の分析】

以下では、各短大がピアノを中心とした保育音楽力をどのように身につけさせようとしているのか、著者が分析できた範囲において、その内容を簡単に紹介する。なお、各校はそれぞれ独自に授業カリキュラムを検討しており、それらに対する批判をすることが、本論文の目的ではない。よって、分析対象とした保育者養成校の名称は伏せる。

① 短大A

当短大では、保育を大きく捉え、福祉の観点で学科を構成しており、子どもの可能性と力を発揮させる支援をすることができる専門的な知識と技術を学ぶことをモットーにしている。そのため、リトミック等身体を用いた演習等も積極的に実施している点に特徴がある。

ピアノの授業においては、初心者は「バイエル」終了程度を目指し、既習者はバロックから現代までの幅広い楽曲を用い、応用力、音楽表現力を育成するためのカリキュラムが組まれている。授業において使用される楽曲は、保育現場でもよく使われるような童謡も多く見られ、実践的なスキルを習得させる意図が見られる。

② 短大B

当短大では、保育において、実践力、表現力、コミュニケーション力の3つの育成を理念におき、特に表現力を強化する為の音楽と表現を組み合わせた各種パフォーマンスの実施に特徴がある。

ピアノの教育にも、表現力が随所で意識されたカリキュラムが組まれており、ピアノ学習と表現学習は表裏一体の関係として位置付けられている。特にピアノの観点から授業構成を見ると、ピアノ演奏、童謡の弾き歌いを基礎から習得することを目的に、1対1での個人レッスンを通して、「バイエル」や童謡等を数多く習得させること、また、

簡易伴奏等についても積極的に実施している。これらの知見を表現系の教育（リズム遊び等）と組み合わせ、表現力を習得させる意図が見られる。

③ 短大C

当短大では、子どもたちの幸せを追究する保育者を育てることをモットーに、実習を重視した実践的な授業・カリキュラムを組んでいる。

ピアノの授業においては、グランドピアノを活用した個人レッスンを行う他、合唱等の授業、手遊び等の幼児音楽の授業を行い、ピアノと歌の2つについてレベル分けをした音楽検定制度を取り入れている。

具体的には、初年度は「バイエル」を用いてグループレッスンをを行い、演習型の授業が採用されている。また、次ステップでは保育者にふさわしいピアノ演奏における表現力を身につけることを目的に、実力別クラス体制のもと、個人レッスン主体の授業を繰り広げ、弾き歌い等の授業も展開されている。

グランドピアノの活用等にも見られるように、本物の音楽に対する感覚をより鋭敏にさせようとする考えが、カリキュラムから見られる。

④ 短大D

当短大では、子どもや保護者と向き合う心を育てることを重視している。

ピアノの授業においては、モニターを用いたピアノ演奏の映写等、設備面での工夫を行っている他、音楽理論、実技の両方を重視し、初めは楽譜の読み方から、徐々にコードの体系や伴奏の在り方等の学術的な知識を教える他、通年でグループ単位での実技指導を行っている。

「子どもの表現活動に正解はなく、音楽でいえば、即興の歌に表れる子どもの気持ちに気づき、それぞれの可能性を伸ばすのが保育者の役割」と

の考えを持ち、そのために保育者となる学生には、多様な知識を保有すること、表現方法を身につけさせることを重視する考えが見られる。

【分析と考察】

いずれの短大においても、各校の理念のもと、ピアノを中心に、音楽に関する基礎と応用の両面で時間をかけて教育しており、その意味で、保育音楽力を体得させるための効率的なカリキュラムが組まれていると言える。

一方、例えば機材等を用いて学習の定着を図ったり、ピアノ等の楽器だけに留まらない実技表現と組み合わせて実践力を養ったり、また、子どもの多様なあり方を受け止めるために、十分な音楽理論の知識を身につけさせることに重きを置いたり、各校がそれぞれの創意工夫のもとに学生を指導している様子もうかがえる。

これらはいずれも、短大が2年という短い期間で学生を育てることについて試行錯誤した結果であり、その意味では過去の蓄積に裏打ちされたカリキュラムになっているものと考えられる。

そこで、さらに上記の考えを前章で挙げた保育音楽力の構成要素と照らし合わせながら、以下に考察を試みる。

〈基礎的スキル〉

上述の通り、各短大とも、これらは最重要スキルと位置づけてカリキュラムを組んでおり、短大の現状の教育において、特筆すべき改善点はないものと考えられる。

〈音楽の幅〉

各短大とも、保育現場で活用されている童謡等の楽曲は、ピアノ演習などで取り組んでいることは事実である。ただし、先述したように、保育の現場においては100を超える楽曲が実際に用いら

れており、まだまだ短大で教えられている楽曲の数は少ないと言えよう。

これは、ピアノ初心者が多く、かつ、2年間で育成しなくてはならないという短大の制約から考えると、厳しい要求ではあるものの、保育者からのニーズには、中長期的な視点も踏まえて対応していく必要がある。

また、現実的に見て、全ての楽曲を短大で習得させることは不可能であることから、学生の読譜力を、より高度に養わせることが必要である。幸い、短大では、時間的制約の中で学生を育成するために、多くの非常勤講師を活用している。ピアノに関する卓越した知識と教育経験を持ち、学生がどのような所で躓き、時間を割いてしまうのか等に関する感度も持ち合わせた非常勤講師の活用方法に多大な工夫が必要と考える。

〈子どもとの対話としての調整・アレンジ力〉

2年間で即興性にも近い調整・アレンジ力を学生に身につけさせることは、短大から見れば、非常に困難なテーマになると言えよう。ただし、授業の展開によっては、一定程度の打開策が考えられなくもない。

例えば、授業のカリキュラム上の進捗を多少前後させることになるかもしれないが、1つの曲を演習する中で、学生がおおよその力を身につけることができたのであれば、他の解釈、演奏法についても紹介、言及し、それらを自主課題として提示することも考えられる。楽譜等の用意が負担(教える側も学生側にも)となるのであれば、ウェブなどを用いた楽譜展開等の手法も考えられる(勿論、著作権等への配慮も忘れてはならない)。

または、より簡易な手法として、一通り基本の課題をクリアした学生には、教員側から聞き取り等の形で演奏を提示し、視覚、聴覚で覚えさせながら、派生形の音楽に触れさせる等の手段も考え

られる。

上述した読譜力等の向上の施策と併せて上記を試すことは、学生の調整・アレンジ力を向上させることに有効と考えられる。

もっとも、このテーマは、2年間という制約のある短大においては挑戦的なテーマであり、これまで主体的にカリキュラム化されてはいないことを考慮すると、既存の手法の組み合わせだけで上手くいく保障はない。そこで、各種施策に取り組む中で、試行錯誤的に有効な手立てを検討していくことが必要となる。例に挙げたように、昨今、学生にも広く浸透しているパソコンやスマートフォンを活用した授業（教員の模範演奏を、録画機能を活用し、視覚、聴覚的に習得させる等）、コンテンツ提供等、既存の枠にとらわれない施策も、積極的に試すことが重要と考える。

〈保育現場における音楽〉

短大としては、実務に耐えうるスキルを学生に教授するとともに、各種資格や採用試験への対応も実施していかなければならない。それらを考えると、正確性を追求しない方向での授業展開は、ある意味、妥協を提供する点も含まれざるを得ない。ただし、短大が提供すべきゴールは、資格や試験ではなく、学生が将来、保育者として十分に機能するためのスキルの提供であることを考えると、完璧な演奏とまではいかないが、どのラインまでは許せるのか等については、教員間である程度の共通見解を持っている必要があると考える。

5. 結論と今後の課題

本論文では、「ピアノを中心とした保育音楽力とは何か?」という疑問を中心に、6つの先行論文の統合的な分析に基づく保育音楽力の定義と、4つの短大の比較を踏まえ、学生に対して保育音

楽力を習得させるための、短大教育の不足点や改善の余地を検討してきた。結果として、本論文では、保育音楽力の要素として4つの要素を提唱し、また、それらの中で短大が取り組むべき施策案を考察してきた。

先述の「保育士及び幼稚園教諭養成校のピアノ指導における一私見」に述べられているように、現行の「バイエル」を中心としたピアノ教育は、日本には1880年前後に持ち込まれた長期的に最適化された手法である。ただし、この手法が、現在の保育士、幼稚園教諭のニーズと完全にマッチしているとは限らないことは、本稿に紹介した「東京都保育士実態調査」からもうかがえる。

本論文においても、保育現場における教育方法の案こそ提示はしているが、今後、さらなる検討が必要である。そこで今後は、本論文で検討した構想について、著者が実施する授業等で検証していきたいと考えている。また、このような実施計画の変更に取り組むに当たっては、各種関係者を巻き込んだ活動が必要になっていくと考えられる。いずれにせよ、これらの構想を試行した結果は、別途論文として報告したい。

参考文献

- 奥千恵子 (2009) 「保育者養成と演奏技法—保育指導としてのピアノ奏法—」 四天王寺 大学紀要 第48号
- 澤田まゆみ (2013) 「保育園・幼稚園教諭に求められるピアノ・スキルとは何か」 新島学園短期大学紀要 第33号
- 新海節 (2008) 「保育士及び幼稚園教諭養成校のピアノ指導における一私見」 帝京学園短期大学紀要 第15号
- 中野研也、河野久寿 (2012) 「保育現場で必要とされる音楽能力と、幼児音楽教育との関連」 仁愛女子短期大学紀要 第44号
- 丸山京子 (2005) 「保育養成校における実践的ピアノ

ピアノを中心とした「保育音楽力」の在り方と養成校の音楽授業に関する考察

ノ指導についての一考察」岐阜聖徳学園短期大
学部紀要 第37号

宮脇長谷子(2001)「保育者養成におけるピアノ指
導の現状と課題—養成校へのアンケート調査を
通して—」静岡県立大学短期大学部紀要 15-W
号

東京都福祉保健局(2014)「保育士実態調査 報告
書(平成26年3月)」

各短大ホームページ及びシラバス

A study on practical piano skills in Kindergartens and Nursery schools and piano education in nursery schools

Hiromi AKAI

【abstract】

Due to the necessity to increase the number of the kindergarten teacher's job or childcare worker's job in Japan, it has become more important for nursery schools to educate the essence of the job to the students.

The purposes of this study are (1) to analyze the practical skills in kindergartens and nursery schools through the survey on past papers, and (2) to consider the better education service for students to attain those skills.

Though there are a variety of practical skills to educate the students, this study focused mainly on the piano skills.

【key words】

Kindergartens and Nursery schools, Piano education, Junior college